

<<東北魂>>を鼓舞する
電子新聞

発行所 株式会社遊無有

〒 207-0015
東京都東大和市中央 1-539-15
<http://tohoku-saiko.jp/>
e-mail:y.s.yumuyu@ozzio.jp

東北再興

Re-Create , TOHOKU!

2 0 2 6 年（令和 8 年）7 月 16 日 木曜日

無料

第170号

毎月発行

発行 2026 年（令和 8 年）7 月 16 日 木曜日

【当新聞発行責任者
兼編集長兼記者紹介】

【砂越 豊】

宮城県生まれ。72 歳の新人映像作家兼プロデューサー兼作家。趣味は古代史・縄文文化研究。現在、埋もれた歴史を掘り起こす歴史書籍の執筆を開始。また、企業価値の増大と IPO を目指す会社と業。電子新聞『東北再興』の発行責任者兼編集者兼記者でもある。



東北の中規模地震頻発は薄気味悪い 専門家は1994年発生の【三陸はるか沖地震】 の割れ残りの可能性を指摘

東北部の太平洋岸
を震源とする地震頻発

十五年前の東日本大震災の記憶がけつて消えないようにと、発生後半年間、毎日、津波と地震の映像をこれでもかと脳みそに叩き込んだせい、か、当新聞で地震を取り上げるのはあまり気が進まない。できれば避けて通りたい気持ちが強い。あれ以来いつも、小さな地震に対しても身構えるようになってきている。自分自身の身体が揺れているにもかかわらず、地震の前触れかとハリネズミのように全身にセンサーを張り巡らすようになった。

東北出身とはいえ、東京圏に暮らす筆者でさえそうであれば、東日本大震災の被災地近くで暮らす人たちの地震への反応は想像するのも困難である。

しかし、これほどまでに地震が頻発するならば当新聞で取り上げない訳にはいかない、今回号で取り上げることにした。

「岩手県沖地震」だけ
ではない頻発する地震

最新の東北の比較的大きな地震は、六月二十五日に発生して、「岩手県沖地震」と名づけられた地震だった。最大震度は六強だった。幸いにも大きな被害がなかったのが救いである。

この「岩手県沖地震」に前後して約一か月に震度一以上の地震が東北の太平洋岸ですでに五十回以上も発生している。異常な多さと言わねばならない。

それだけでなく、二〇二五年十一月以降、青森県東方沖から三陸沖にかけて相次ぐ地震が発生している。

そのなかでも、この「岩手県沖地震」と四月二十日の「マグニチュード7.0の三陸沖地震」と昨年十二月に発生した「マグニチュード7.5の「青森県東方沖地震」」が特に大きい。

大地震の前触れか？

これだけ頻発すると、東

日本大震災がそうであったように、これらはもつと大きな地震の前触れではないかと身構えてしまう。

専門家によれば、頻発する青森県から岩手県北部でのマグニチュード7クラスの地震は「過去百年でも例はない」という。

例がないというのはどういうことかはよく分からない。

筆者は、地震専門家には地震予測は不可能だと堅く信じている。また、今後の地震発生のお話をするときには必ず研究者としてのリスクヘッジをして、発生しても、発生しなくてもよいように逃げ道を作るのであまり信用はしていない。

そうではあるが、二応、専門家のコメントを引用してみよう。

「三陸はるか沖地震」
との関係

「平成六年（一九九四年）から三陸はるか沖地震」と命名された地震があった。青森県八戸市の東方沖

約百八十kmを震源とし、マグニチュード7.6の地震で、最大震度六だった。

八戸市を中心に死者三人・負傷者七百八十八人の人的被害、全壊七十二棟・半壊四百二十九棟、一部損壊を含めると九千五百棟以上の被害などの物的被害を生じた大きな地震だった。

八戸にあったビルの一階にパチンコ屋があったが、その一階部分が押しつぶされたのが有名である。

今後の地震発生可能性

そして専門家は言う。「三陸はるか沖地震級の地震発生確率は、今後三十年以内に九十%程度以上」が続いて、「十分ひずみがたまっている、最後の割れ残りがあがるのでは」といふ。すなわち、今後三十年以内で九十%程度以上の確率で「三陸はるか沖地震」クラスの地震が起きるかもしれないということである。

さらに、「依然として九十四年の三陸はるか沖地震のところだけは、最近地震が起きていない領域となっていて、周りだけ地震が次々と起こっている状況なんです」。

「（三陸はるか沖）地震を起こした場所が十分ひずみがたまっている、最後の割れ残りがあがるのではないかと」といふことで、そこでの地震の発生可能性が指摘されているわけです」

次の地震への備え

だから、次の地震への備えしつかりしろと求めているのである。

「九十四年に建物被害が出たのは、あの場所で断層がずれると比較的長周期の、周期の長い揺れが出たということの意味している」

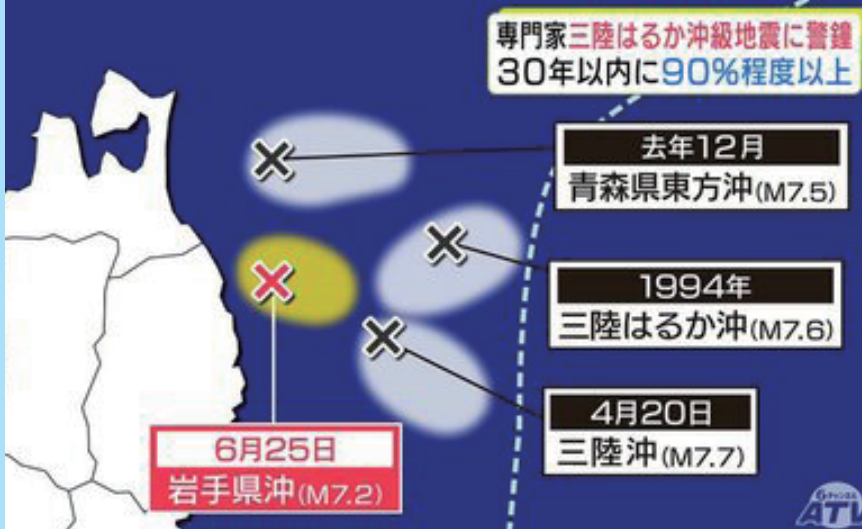
「それと同じような揺れになる可能性がある。被害が最近の地震ぐらいでは済まない可能性もあるということですよ」

それなので、以下の項目について、しつかり対策せよという。

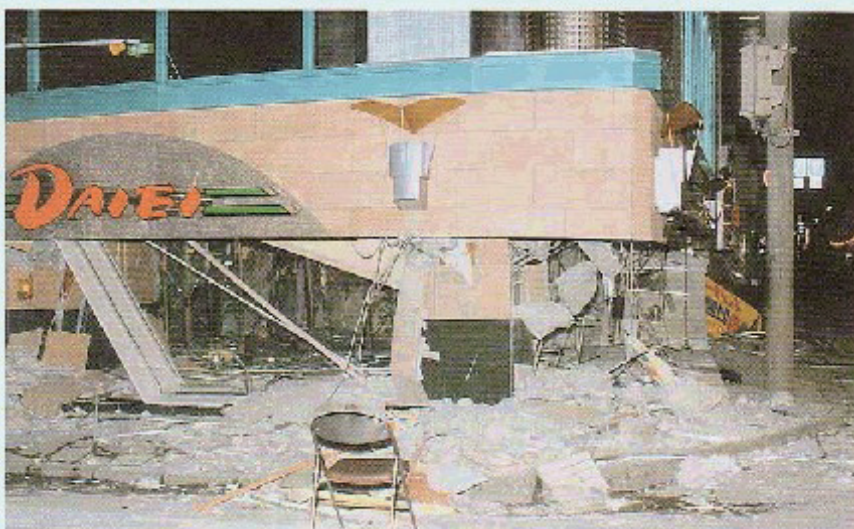
●まず「ベットや布団の頭上に物は置かない」
●諸々の調査で特に対策が低かったのは「窓ガラスの飛散防止対策」

内閣府は、日頃の備えとして十二項目を求めているが、調査では青森県はすべて全国平均を下回った。いつ起きるかわからない地震に備えて、日々の準備を進めることが大切だと勧告している。

筆者としては、いまだに東日本大震災の可能性が起きているので、次の地震が起きないことを切に願いつつも、東日本大震災級ではなく、「三陸はるか沖地震級」にとどまって欲しいと願わずにはられない。



6/25 に発生した岩手沖地震と1994 年発生の【三陸はるか沖地震】との震源地地図・・TBS NEWS DIG より



八戸市のビル一階部分のパチンコ屋が押しつぶされた【三陸はるか沖地震】・・八戸市HP より

もうすぐ【クマ症候群】という新たな病気を産む！

クマが人の知恵を追い抜き人のなわばりを浸食しはじめた すでに「駆除」すればいいという状況を通り越してしまった

クマニュースにマヒしているのがとても危険

実際にクマの出現におび

える東北などの一部のエリアを除けば、住宅エリアに頻繁に出現するクマのニュースを耳にしても国中がすっかり慣れっこになってしまっているのではないかと？

当新聞はこの点がすごく心配である。

今後有効な対策を打てず、今よりもっと状況が悪化したら、次にどういう変化が起きるのかを考えてみたい。

とうとうクマの知恵が人間を追い越した

クマのなかには同じ住宅に連続して侵入して、家庭内にある人間の食糧を漁っているものまで出現しているのが実情だ。

住宅街だから「駆除」がむずかしいからということで、こうした状況となっているのだろう。

「駆除」がだめなら「箱わな」設置があるだろうと反論されるかもしれない。

そしてここからが問題なのだが、ある地域では、クマを捕獲するための「箱わな」をクマが危険なものと認識して近づかないものまで現れているようだ。

これでは「箱わなをいくつも仕掛けてもムダである。これは、いわば、クマの知恵がいつの間にか人間の浅知恵を越えてしまったということの意味する。

クマ問題が騒がれてから一向に動き出さない人間側の対策が後手後手に回っている間に、クマにたつぷり学習する時間を与えてしまい、クマの知恵の成長の方

66058 箱罠・片扉・ツキノワグマ用



ツキノワグマがこれは「ワナ」だと気づいて捕獲用に使えなくなるかも・・・デーリィマン社より拝借

に軍配が上がったということなのだろう。

まことに情けないし、事態がここまで進んでも、依然として有効打が見いだせない人間の怠慢にだんだん腹が立つてくる。

人間居住区とクマ生息域（なわばり）が重なる

これほどまでに頻繁に住宅エリアにクマが出現するというのは、ある意味で、人間の居住区とクマ生息域、すなわち「なわばり」が重なってきたということである。

しかも、そこからクマを完全に排除できないということは、クマの勝利で、人間側の敗北を意味する。

まさか、クマに人間のなわばりを明け渡すとも言えるのか？

当新聞は、むやみに野生動物を駆除することに賛成する側ではないが、事態がここまで来ると、クマに負けるわけにはいかないと思うのである。

しかし、クマの変化のスピードは予想以上である。従来のクマに関する「常識」は場合によっては捨てた方がいいのかもしれないと思う。

人間の食べものがクマの主食になってきた？

クマの食性も大分変化してきたようだ。

山の奥の方に暮らすクマは従来通りの食生活かもしれないが、人間居住区に超

接近しているクマの食性は、人間の食性にどんどん近づいている。

そのクマたちは、もはやドングリではなく、柿などの果樹から田んぼの米、畑の野菜類、飼育中のニワトリを食し、季節に左右されない食生活を送っているのではないかと？

また、もっと過激なクマたちは、人間の飼う犬や猫も食糧ではないのか？

さらに人間に恐怖を感じないクマは、反撃して来ない人間の住居にある食べ物を漁るまでに至ってはいないだろうか？

クマ研究怠慢の結果

ときどきTVでクマ問題を解説している「研究者」にもイライラしてくる。

これまでいったいクマの何を研究してきたのか？このなることを予測できなかったのか？なぜ、クマがすごいスピードで増えているそのままでと今の状況になるとなぜ警告してこなかったのか？

なんの有効策も持たずに、よくTVで悠長に解説できると感じる。

機会あればそう言いたい。残された手段は駆除しかない

ともかく、住宅街に出没するクマは残らず「駆除」するしかない。

「駆除隊の人数」が足りないというならば、全国に散らばるマタギ関係者の助け

を借りるしかない。

いまからクマ撃ち要員を養成しても間に合わないし、クマは何発撃ち込まれてもなかなか死なないというので、実戦経験を積まないとい

現場に出すのは無理だろう。それから、よく耳にする動物愛護団体からのクレームには、法律の専門家に対処させればよい。専用電話にすぐ転送すればよい。

また一般人の「駆除されるクマがかわいそう」という声には、匿名電話は拒否し、住所や氏名や電話番号を名乗らせて、法律専門家が対処すればよい。

必要ならば、クマが出没するエリアの見学会を設けて彼らを現地に勧誘すればよい。そうすれば、電話してくる回数は大きく減少するだろう。

マタギの知恵を借りてクマ・シカ・イノシシ対策も同時に行うべし

運よく住宅街に出没するクマをすべて「駆除」できた後のことも今から考えておく必要がある。

二度と今のような状況が来ないようにするためのあらゆる対策を検討してもらい、それを施策として仕上げて、各自治体に周知徹底させることが肝要である。

特に、クマ対策だけでなく、同じように増えているシカやイノシシ対策も同時進行で進めるべきである。

【クマ症候群】出現の可能性に対処すべし

もう一つ重要な対策が必要である。

これまで述べたのはクマを中心に見た対策だが、もっと大事な、クマ被害で影響を受けた人間に関する対策が必要なのだ。

その① 子供たちの外歩き不能への対策

何と言っても深刻なのは子供たちだろう。

秋田県内では子供たちの登下校時は、スクールバスで通学させたり、親が送迎したりするのが当たり前になっている。しかも、バスが来るまでは親が子供に付き添ったりして、家族全体、地域全体でクマを警戒する状況とのこと。この点で、学校はもちろん、親の負担も増えている。

さらに、街中では外で遊ぶ子供たちの姿が消えているという。

クマが出るからと、親が外で遊ばせないようにしているし、そもそも遊びにいけないような雰囲気もあるようだ。

子供たちの通学路や市街地にまで普通にクマが出没し、いつどこにクマが出るかわからない不安が、県民を襲っている。

その② コロナ禍のような外出不能状態

ある秋田県民は次のような不安を口にする。

「クマのせいで外出もままならないこの状況がいつまで続くのか、不安ですし、残念です。コロナ禍が明けたと思ったら、今度はクマですよ。自由に外も歩けない……と、心身の不調をきたすほどのストレスになる人が増えていると思います」

一連の話を聞くと、まるでコロナ禍の「緊急事態宣言」中を思わせる事態になっているのがわかる。そのうえ、異常気象によって秋田県内も三十度以上の猛暑になることが増えてしまい、子供は外で遊ばなくなり、大人も外出を控えるようになってしまった。

こうなると、県民の健康面は大丈夫か、と不安にならざるを得ない。

外に出なくなってしまうたせいで深刻な運動不足に陥る人が増え、県民の健康面にも大きな影響を及ぼしているのだという。

「ほぼ毎日のようにクマの目撃情報が出ています。そのせいで、クマが怖くて外出を控える人は増えていく印象を受けます。山菜採りに行っていた高齢者がクマに襲われる事故があったりした影響もあって、私はあまり山には行かなくなりまして、行っても早く戻ってくる人も増えたそうです。」

外に出ないだけでなく、農作業にも影響が出ている。

その③ 先の見えない不安にがんじがらめ

クマの出没情報は自治体からも発信されているが、ワナを仕掛けてある程度の数を捕獲したという話はほとんど聞かれないという。

県民を安心させる情報発信がなく、ただただ不安をおおるだけと受け止められている状況もある。

これでは出口のない牢獄に永遠に閉じ込められているのと同じである。

クマ鈴や、クマスプレーを携帯する人が増えているようだが、大方の人はクマスプレーの効果には懐疑的だという。

テレビの映像から見るクマの動きは速いし、カチャカチャッとクマスプレーを出す準備をしている間に、襲われるんじゃないかと感じている人も多いようだ。

所持しても使えず、意味がないのではないかと語る人が周りにも多いという。

真剣な取組みを望む

残念ながら、今のままでは、出口の見えないクマ問題がこれ以上引き、派生的な問題が次々に発生していく光景が見えてくる。

クマ問題の物理的な対策以上に、生活精神面でのサポートには真剣に取り組んで欲しいと願うばかりだ。もう限界だという人が一挙に出現しないように、関係省庁も各自治体も取り組んで欲しい。もう待ったなしなのだ。

新シリーズ ①【東北発の令和列島改造計画案】

かつては東北から大都市圏へ出稼ぎに行った 今度はあらゆる場所から東北に出稼ぎに行く！

新シリーズ開始

これまでで当新聞は、たくさんさんの課題を抱える東北の中小企業への対策と急激に進行する人口減少対策を別々にシリーズ化して検討してきた。

これを今回号から合体させ、【東北発の令和列島改造計画案】という突拍子もないと思われる企画にまとめあげ、かつシリーズ展開しようと考えた。

合体させた理由は、東北の中小企業問題と人口減少問題の双方の問題は密接不可分に関連しており、それぞれがうまくいかない理由も根本のところであつて、同時に、同じ次元で扱う方が、問題の構造をより明らかに浮かびあがらせることができるし、解決策もより容易に導き出せると考えたからである。

人口減少解決策としての「東北に出稼ぎに」

これまでのシリーズで見てきたように、東北から人口が流出するのは、まずは若い女性に魅力ある仕事を提供出来ないことで大都市圏に流れていくことがあり、そして給料が大都市圏に比べて見劣りすることで流出するということがあった。

そこで、こうした流れを食い止め、逆に東北に人口を流入させ、増やす方法を考えた。

それは、あたかも、先の終

戦以来続いた「東北から大都市圏へ出稼ぎに」という流れを逆流させ、「大都市圏その他あらゆる地域から東北に出稼ぎに」という流れを作ればよいのではないかと考えたのである。

もちろん、そのためには、東北に魅力的な仕事を創造するというのが絶対条件であるのは言うまでもない。

東北一次産業をミニ人工都市に集結する

東北の中小企業対策の最大の課題としては、労働力不足問題の解決という課題があつた。

中小企業の労働力を増やすのに必要なものは何といつても高収入で、将来的にも十分な成長が見込める仕事の創出であり、それを補完する充実した福利厚生システムである。

つまり稼げて、しかも将来にわたって安心して従事できる仕事づくりと暮らしやすい環境づくりだった。

それを解決する方法として考えたのが、今後有望な産業を一か所に集約して、同時に起業も推進することで、一大産業革新を行うことである。

具体的には、東北に多く、見方を変えれば強みにもなる一次産業の中小企業を一か所に集めて、しかも六次産業に変身させることでありと考えたのである。

とりあえず水産業から

東北には水産業と農業と

いう一次産業があるが、これまででは非常に付加価値が低く、そのため産業従事者が高収入を得られず、若い人にも敬遠され、高齢化が進む結果を招いていた。

これを大改革して、付加価値を一挙に高くし、高収入を得られる構造に転換することが求められてきた。

水産業も農業も同時に、こうした大転換が出来れば理想ではあるが、まずは水産業から始めようと思う。

その理由としては、現在あちこちで進められている「陸上養殖産業」を東北で活

発化するチャンスが到来していると思うからである。

この「陸上養殖産業」は、既存の水産業利権から比較的自由に事業推進が出来るというメリットがある。

具体的には、どういう場所でも「陸上養殖産業」は可能であり、既存の漁業従事者が持つ漁業権問題が事業推進の足かせにならないというメリットがある。

しかも、地球温暖化で、陸上養殖推進が急務となっていることから、他分野からの事業参入が活発化しているので大チャンスである

考えたのである。

東日本大震災被災地に水産業の六次産業ミニ都市建設

さらに、出来れば、かつて東北水産業の担い手だった東日本大震災被災地に、またはその近くにそうした「陸上養殖産業」を積極的に誘致するというのはどうだろうか。

そのうえ、「陸上養殖産業」単体だけでなく、それに関連する高付加価値創出のための「商品開発と販売」「国内はもとより世界へ向

けた商品供給拠点」なども一体化したまちづくりを行う。

いわば、東北水産業の六次産業ミニ都市建設計画である。

いきなり大きなまちを創出するというのは無理があるし、時間もかかる。そこで、特定の産業集積プランに限定した超ミニ都市の建設であり、これならば実現可能性が一挙に高くなるだろうと思つたのである。

高付加価値産業は人を呼べる産業でもある。

東北圏内だけでなく、全国からも人を呼べる。いや世界からも人を呼べる。そうした流れによって、人口増加が狙えるし、これまでは高齢化に悩まされてきた東北に若い人材が流入する効果も期待できるのである。

まさに理想的な大逆転構想であり、そんなことが現実には起きるとは考えにくいという批判もあるだろうが、とにかく具体的に検討してみる価値は十分すぎるほど

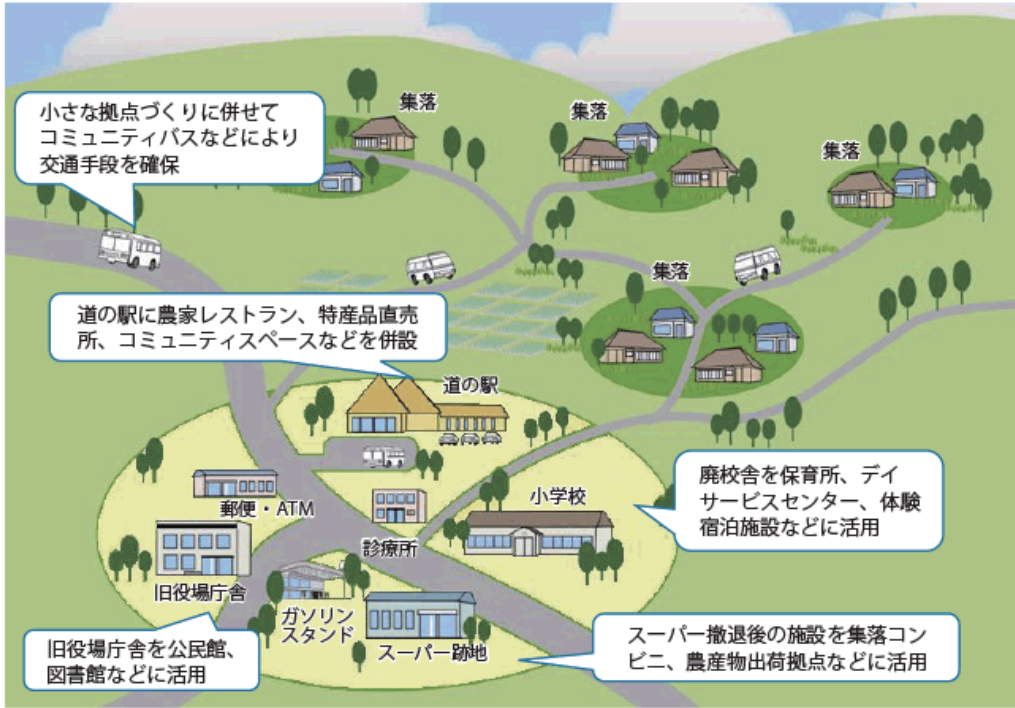
あると思うのだ。

目指すミニ都市モデル

理屈ばかりでなく、具体的なまちをイメージしてみると理解しやすいだろう。

左図は国土交通省が過疎対策として提示したスマートシティーのイメージ図であるが、これを転用して、東北水産業の六次産業ミニ都市建設の概要を検討してみた。さらに具体化が必要だろうが、とりあえず一回目のイメージとして共有してもらえれば幸いである。

下記は「過疎地域のスマートシティー化」イメージ図 (国土交通省資料より)



資料) 国土交通省



上記「過疎地域のスマートシティー化」図を転用して変換

- ① まちの中心部に「**6次産業化工場**」設置
水産業の陸上養殖施設含む
商品開発施設含む
商品発送拠点含む
- ② 過疎地集落の代わりに、まち中心部近くに住宅設置
- ③ 行政・郵便・銀行集約のミニワンストップ施設設置
- ④ ミニレクリエーション施設も設置

2026 年（令和 8 年）7 月 16 日（木曜日）

第 170 号

http://tohoku-saiko.jp/

伊タコに会った

弘前へ

先日、青森の津軽地域にある弘前に行ってきた。主たる目的は、伊タコにお会いすることである。

伊タコと言うと、下北の恐山が有名であるが、別にも恐山に伊タコがいるわけではない。恐山の大祭の時に県内各地にいる伊タコが恐山に来て口寄せ（亡くなった人の魂を呼んでそのメッセージを伝えてくれること）をしてきている。

恐山と伊タコの関係は、神社とお祭りの出店の関係のようなものだそうで、伊タコたちは普段は主にそれぞれの自宅で口寄せを行っているのである。

伊タコの役割

伊タコはおそらく、身内を亡くした人のグリーフケアを担ってきた人たちなのだと思っている。グリーフケアというのは、悲嘆に対するケアのことで、亡くなりゆく人へのケアと同じくらい重要とされている。大切な人を亡くした人に対してても適切なケアが提供されなかった場合、そのネガティブな影響が後になって心身の不調や疾病の罹患という形で表出することもままあるからである。

今でこそそうしたグリーフケアの重要性が指摘されるようになり、そのための専門職のスキルというのも確立してきている。しかし、以前は遺族に対するケアというのはそれほど重要視されておらず、患者が亡くなった後で家族との関わりも終了、ということが多かった医療が充実していなかった時代にはなおのことである。

そのような状況の中で、遺族が亡くなった人に対して言いたかったことや聞きたかったことを引き出して、生きていた時にあえてあげればよかったというように思ってもらって、大丈夫だよ、あれでよかったんだよと、亡くなった人本人からのメッセージという形で言っであげて、遺族が悩まずにその先の自身の生活が続けられるようにケアするための存在こそが伊タコである、と私はそうに捉えている。

減り続ける伝統的伊タコ

その青森の伊タコであるが、二〇年くらい前まではまだ数十人単位でけっこうたくさんいて、中には電信柱の広告に名前を出している伊タコもいた。しかし、ご多分に漏れずこの領域でも、高齢化と後継者不足とで年々その数が減少していて、「自称伊タコ」などではない、しっかり師匠に付いて、その元で伝統的な修行を経て伊タコになった人は、私を知る限り、もはや三人しか残っていないのである。

なお、今は青森にしか残っていないが、かつては東北全域に伊タコと同様に、死者の言葉を伝えてくれる人たちが存在した。国の無形民俗文化財に登録されているものだけでも東北地方に五つも存在している。いずれも「盲目の巫女たちによる、口寄せ・加持祈祷・ト占などの業」とされているものである。

それらのうち、山形県の内陸、村山地方では「オナカマ」と呼ばれている。

今回私が訪れた津軽の伊タコも、無形民俗文化財に登録されている。その説明では、「青森県の西部、津軽地方では、伊タコと呼ばれる盲目の巫女たちが、古くから口寄せ・加持祈祷・ト占などを業としてきた。そのほとんどは今日老齢に達し、

後継者も少なく衰滅にひんしている。入巫・成巫の過程をはじめ、巫業や唱え言といった伊タコの習俗や、オシラサマと呼ばれる神の依り代の祭祀、それらに用いられる多様な用具は、東北地方の民間信仰を知るうえで貴重なものであり、早急に記録作成をする必要がある」とされている。

宮城県と、福島県の浜通りでは、「オガミサマ」と呼ばれている。岩手県では北部の旧南部藩地域では青森と同様伊タコと呼ばれ、南部の仙台藩地域では、宮城県や福島県浜通り地域と同様、オガミサマと呼ばれているからである。

秋田県も同様に主に県北部、津軽と接する地域にかつて存在し、伊タコまたはイチコなどと呼ばれていた。

このように呼び名は、東北の全域に伊タコと同様の役割を果たしてきた巫女がいたのである。ただ、青森以外では既にその伝統が絶えて久しい。無形民俗文化財に登録されている五つの中に、恐山のある下北半島は含まれていないことから分かるように、伊タコイコール恐山ではない。

現存する伊タコは二人

無形民俗文化財における説明にあるように、伊タコになれるのは女性で、かつつては盲目の人という要件もあった。医療が発達していない頃、幼少期に麻疹に罹るなどして失明することも多かった。男子の場合は、三

味線弾きや鍼灸師になるケースが多かったが、女性の場合は、それでこの伊タコがその職業的自立の方法の一つでもあったようである。

その盲目の伊タコの最後の一人が、今なおいる三人の伊タコのうちの一人であったが、その伊タコ、中村タケ氏は、既に九〇代半ばで体調が優れないとのことで、今年から口寄せを行っていない。そうすると、現在も活動を続けている伝統的な伊タコはもう二人だけということになる。

その二人のうち、八戸にいて「最後の伊タコ」として有名な松田広子氏はまだ五〇代なので、もうしばらくは口寄せをしてくれそうであるが、伊タコの師匠となる資格をお持ちではないらしく、弟子は取らないと言っている。ゆくゆくは伝統的な伊タコは、人もいなくなってしまう定めにある。そうした現状を踏まえて、今のうちに一度、本当の、「自称」でない伝統的な伊タコにお会いしてみたいと思ったのである。

津軽の伊タコマチ

祭祀の際に伊タコが集まる神社のことを「伊タコマチ」と言う。恐山は最も有名な伊タコマチだが、青森県内にはそれ以外にも伊タコマチが複数存在していた。南部地域のおいらせ町の注連寺、階上町の寺下観音、津軽地域の弘前市の赤倉神社、五所川原市の旧金木町の川倉賽の河原地蔵尊などがそ

れである。しかし、今も祭礼の際に伊タコがいる伊タコマチは、恐山の他は川倉賽の河原地蔵尊だけである。

この川倉賽の河原地蔵尊、特定の宗派に属さず、地域の人たちによつて大切に守られてきた寺院である。地元には伝わっている言い伝えによると、数千年も昔、この地方の天空に不思議な御燈明が飛来し、その光に照らされた場所から地蔵尊が発見されたという。その地蔵尊を安置したのがこの寺院の始まりとのことである。

御本尊はその名の通り地蔵菩薩。恐山と同じである。境内はそれほど広大というわけではないが、霊場としての雰囲気は濃密である。境内の至る所に大小さまざまな地蔵尊が祀られている。本堂の地蔵堂に入ると、御本尊の地蔵菩薩を取り囲むようにここでも無数の地蔵尊が安置されており、その雰囲気は圧倒される。また、故人が別の世界で困らないようにと遺族が奉納した衣類など様々なものが置かれている。恐山の本堂や八角堂にも様々なものが奉納されていたが、それと同様である。本堂とは別に、独身のまま亡くなった人が別の世界で結婚できるようにと亡くなった人の写真と相手となる人形とが奉納されている人形堂もある。

津軽最後の伊タコに会った

この川倉賽の河原地蔵尊

の例大祭にも、かつては伊タコがたくさん集まっていた。しかし、津軽を代表するこの霊場に足を運ぶ伊タコも、私を知る限り今やもう、一人だけである。

今回は、その津軽唯一の伊タコである木村妙海氏にお会いしたくて、弘前の郊外にあるお住まいを訪ねた。初めてお会いする木村氏は、優しい雰囲気での品よい印象の高齢のご婦人であった。木村氏は、伊タコの修行とは別に、高野山でも修行して、真言宗の僧籍もお持ちだそうである。

口寄せしてもらおうと思つたのはもちろん、震災で亡くなった私の弟である。名前ではないが、霊場としての雰囲気は濃密である。境内の至る所に大小さまざまな地蔵尊が祀られている。本堂の地蔵堂に入ると、御本尊の地蔵菩薩を取り囲むようにここでも無数の地蔵尊が安置されており、その雰囲気は圧倒される。また、故人が別の世界で困らないようにと遺族が奉納した衣類など様々なものが置かれている。恐山の本堂や八角堂にも様々なものが奉納されていたが、それと同様である。本堂とは別に、独身のまま亡くなった人が別の世界で結婚できるようにと亡くなった人の写真と相手となる人形とが奉納されている人形堂もある。

津軽最後の伊タコに会った

この川倉賽の河原地蔵尊

おいてほしい」と言われたことである。

私の実家で、コーヒー好きの私の父親は、毎朝自分のコーヒーを淹れると、弟の分とということで、生前弟が使っていたカップにコーヒーを入れた。供えるのだが、そう言われてみれば、確かに冷めるとすぐに仏壇から下げてきてしまっていた。もちろん、そのようなコーヒーの話など木村氏にはしていないし、仏壇に毎朝コーヒーを供える家もそんなにあるとは思えない。仙台に帰ってからすぐ実家の両親に伝えたらやはり驚いていたが、これからは一日置いたままにしておくと約束してくれた。

このような、単なる理屈では説明できないような、神秘的で不思議なところもあるのが伊タコなのだと思われる。以前、川倉賽の河原地蔵尊の寺務所の方とお話した時にも、そのようなことがあると聞いてはいたのだが、まさか自分でもそれを実際に目の当たりにできるとは思いもよらなかった。いい経験になった。

依然としてある伊タコへのニーズ

木村氏はかなりご多忙のよう、私が訪れた日も午後から出張とのことであつたし、その翌日も翌々日も出張とのことであつた。

口寄せを目的としたツアーもたくさんあるそう、そうすると木村氏はもう一人の松田氏と共に、ツアー客の滞在している青森県内の

温泉旅館に向いて、順番に口寄せをするのだそうである。木村氏は、青森県内だけでなく、山形の湯野浜温泉にも年2回行っているとのことであつた。

調べてみると、企画している旅行会社は、一社だけではなくいくつもあり、全国各地を出発地とする、伊タコの口寄せを目的としたツアーが、たくさんあるのが確認できた。宿泊するホテルがいずれのツアーでも、陸奥湾を望む野辺地町にある馬門温泉と共通しているのが興味深い。

これら伊タコの口寄せツアーは、下北半島にある恐山の観光とセットのことがほとんどだが、宿泊が下北半島のホテルではないのは、口寄せに来る木村氏ら伊タコの移動の都合を考へてのことだろう。下北半島は、同じ青森県内からであつてもかなり遠い。その点、馬門温泉のある野辺地町なら、伊タコも来やすいし、ツアー客が下北半島に向かうのにも、青森県内の他の地域より行きやすい。

私がある間にも口寄せを依頼する電話が掛かつてきていたし、伊タコのニーズ、いまだにかなりたくさんありそう、ということも分かった。木村氏も既に八〇代半ば。お身体に気を付けて、これからも長くたくさんの人たちの助けになつてあげてほしいと思う。

東北 TOPICS

当新聞が独自に選んでコメントするスモールニュースコーナー

東北地方の倒産件数は高止まり



（出所）東京商工リサーチ東北支社
東北倒産件数推移・・・日経新聞より

東北の倒産件数減少 全国では「増加」しているなか まだまだ安心はできない

東京商工リサーチ東北支社が発表した一〇六月の東北地方の企業倒産は、前年同期比二十一％減の二百四十七件だった。上半期に倒産が減ったのは五年前ぶり。

全国統計では増加傾向なので、予想外であり、少しほっとできるかといえば、そうではないようだ。同社の担当者は「ポジティブ要素があったわけではなく、減少傾向が続くかは見通せない」と指摘する。

負債総額は合計六百三十四億三千二百万円と四十一％増えた。私募債を発行していた福島建設資材（福島市）が負債総額三百三十二億円を抱えて二月に倒産した影響が大きい。一方で負債額が一億円未満の倒産が全体の六十六％で、小規模事業者が大部分を占める。

業種別では「サービス業他」が六十九件で最も多く、建設業（五十件）、製造業（三十七件）が続いた。県別では宮城が七十九件で最多、山形四十三件、福島四十の順である。

東京商工リサーチは先行きについて、物価高と金利上昇への対応をポイントに挙げた。中東情勢に伴いナフサをはじめとする石油精製品の品薄と価格上昇は、中小・零細企業への負の影響として広がりつつある」とも指摘した。

東北ではアジアからの旅行者の消費単価が高い

1位	シンガポール	15万4814円
2位	香港	15万4633円
3位	中国	10万4325円
4位	台湾	10万3662円
5位	ドイツ	9万3907円
6位	フランス	8万8728円
7位	米国	7万6825円

（注）2025年、観光・レジャー目的
（出所）東北運輸局

東北へのインバウンド消費各国
ランキング・・・日経新聞より

25年度東北インバウンド最高 1人当たり単価上昇 インバウンド対策も準備必要

東北運輸局は十四日、東北地方の二〇二五年のインバウンド（訪日外国人）旅行消費額が二四年比四十三％増の千六十二億円だったと発表した。初めて千億円を超えて過去最高となった。旅行消費額の伸びは外国人延べ宿泊者数の伸びを上回った。一人あたり消費単価

が増えている。旅行消費額を県別で見ると宮城が四百七十五億円、最も多く、青森百九十三億円、山形百四十七億円と続いた。最も少なかったのは秋田の四十五億円、六県で唯一二十四年を下回った。観光・レジャー目的の1人あたり旅行消費単価は1十九％増の九万八千三百二十一円。

国・地域別ではシンガポールが首位で、香港、中国、台湾が続いた。東北の旅行消費単価の伸びは全国の運輸局ブロック別で最大。ただ実績では関東の十六万五千八百八十八円）や近畿の十三万九千五百円などの差が大きい。

全目的での旅行消費額の増加幅を費目別にみると、宿泊費が六十四％増で最も大きかった。東北運輸局長は「旅行事業者からは（インバウンドが）より質の高い宿泊を求めているとの声が聞かれる」と説明。ビジネスホテル利用がリゾートホテルに切替えた例がある。

宮城・雄勝で漁業体験 新たな観光と漁業PRの試み ぜひ他地域にも拡大しよう



被災地雄勝の漁業体験画像・・・MEET MORIUMIUSより

東日本大震災で人口が四分の一以下に激減した宮城県石巻市雄勝町に、農業や漁業を体験できる施設「モリウミアス」がある。これまでに利用したのは小中学生ら延べ約一万五千人。子どもたちの間に「自然に触れる経験で、旅行とは違った体験ができる」と好評だ。モリウミアスは雄勝湾を見下ろす高台にあり、周囲には山もある。地元で捕れた魚を料理したり、森で集めたまきで風呂を沸かしたりする体験ができる。

日本酒ファンへ【伊達7】復活 待ちに待った新酒企画 ぜひ飲んでみたい東北地酒



【DATE SEVEN】新発売・・・河北新報より

宮城県内の七つの蔵元が共同で造る日本酒「DATE SEVEN（ダテセブン）」の新作二種が今月発売された。十二年目となる今年は、川敬商店（美里町）と山和酒造店（加美町）がリーダー蔵を務めた。川敬商店が仕込んだ「黄金澤 style」は、フルーティーでふくやかな味わいが特徴。山和酒造店の「山和 style」は、キレがあり、すっきりした口当たり。宮城酵母と県産の酒造好適米「蔵の華」「吟のいろは」を使用。ボトルは歌舞伎の「連獅子」をモチーフにデザインした。

価格は二種ともに一本七百二十cc入り二千九百七十円。全国酒販店で購入可能。

東北スポーツニュース

東北のチーム・出身者や東北拠点の選手の活躍



若隆景（荒汐部屋による）

痛みが激しくなり救急車で搬送され
「大腿コンパートメント症候群」と診断、緊急手術

「大腿コンパートメント症候群」と診断
・・infoseek news より

不死鳥になってくれ！若隆景 大関取りどころか再び大けが 試練を何度与えればいいのか

当新聞の先月号で若隆景の不屈の闘志による復活優勝を取り上げたばかりだというのに、運命の神さまはいつた若隆景に何度試練を与えればいいのか？大けがから大復活して先場所に優勝したばかりだというのに！あまりにもひどい仕打ちというものだ。本人だけでなく、家族も部屋関係者も、福島県民も先場所の優勝でいよいよ今場所は念願の大関取りかと勇んでいたはずであるが、再びの大けがでその望みは絶たれた。

*

一日の出稽古後に左太ももの違和感を訴えた若隆景は痛みが増したことから病院に緊急搬送。「コンパートメント症候群」と診断され緊急手術を受けた。現在も入院中で退院のメドは立っていない。当然、名古屋場所を休場することになった。

*

東関脇で迎えた二〇二三年三月場所で涙の初優勝を果たし、大関昇進の期待が高まり始めたが、二十三年三月場所右前十字靭帯損傷、右外側半月板損傷などの重傷を負い、三場所連続で休場。番付を幕下六枚目まで落としながら、不屈の闘志で這い上がり、万感の復活Vを果たしたと思ったらこれである。

不死鳥のような復活を期待するのは酷であろうか？それ以上に、本人の精神状態も心配である。



先場所優勝したばかりなのに・・yahoo news より

大谷選手 先月第二子誕生、左膝の手術でオールスター欠場、だがHR連発の不思議

「まことにおめでとういいます！」

年子だとかなんとか騒いでいる輩もいるようだが、無視すればよい。

同僚のフリーマンを追いかけるようにどんなに家族が増えていくのだろうか？

マウンド上で怒った？

ドジャースの新人キャッチャーとの「事件」もあった。

大谷選手がマウンド上でそのキャッチャーに怒っている表情を見せたのだ。

打者の大谷選手はいつもにこやかだが、ピッチャーの大谷投手はよく怒るという話がささやかれていたが、それをみなが見てしまったのだ。怖い大谷選手？

でもその後はいつもの表情に戻ったので安心した。

上腕二頭筋に違和感

今日四日は二刀流の日だったが、上腕二頭筋に違和感を抱えて降板した。あとで分かったが心配だった。しかし、三日後には試合に出て十九号三ラン本塁打を放つ。訳が分からん活躍。



「第二子と第一子の足裏画像・・」東洋経済オンラインより

オールスタートップ票

ファンによる投票で、ナ・リーグ最多票を獲得。指名打者(DH)として五年連続五度目の先発出場を決めていたが、選手間投票でも嬉しい一位選出となった。

左膝の手術でオールスター欠場

まさに突然の悲しいニュースだった。オールスターを欠場するとのニュース。

原因は以前から心配されていた左膝。そこに水が溜まるので手術が必要で、三連覇のためにはどうしてもシーズン途中での手術が必要ということで、残念ながら欠場となった。

大谷選手が一番目指すものがチームの優勝であることが示されたのだが、実に残念なことであった。

その後は本塁打連発

しかし、再び大谷選手に驚かされる。

オールスター欠場発表後のホームラン連発。左膝が悪いというのに、この活躍はいつたどうなっているのかと騒がれるのも当然である。

最早「バケモノ級」と言わねばならない。

無事に手術が成功すること、チームの三連覇に向けて頑張つて欲しいと願うのみである。



オールスター直前の 22 号本塁打、直近 6 試合で 4 発、通算 350 号・・TBS NEWS 604 DIG より



ホシガラス



フロントガラス越しの小熊



ヒカリゴケ



ギンリョウソウ



コメツガ



クリの雌雄花

シリーズ 遠野の自然
「遠野の小暑」
遠野 1000 景より



モミジイチゴ

最近、岩手や青森など東北太平洋側を震源とする地震が頻発している。東北人はきつと東日本大震災を思い出しているにちがいない。あまり地震が頻発すると、知らず知らずのうちに、わずかな身体の揺れも地震の

前触れではないかと身構える習慣が出来てしまう。そして東北には大雨も降っている。これも少し前の洪水を予感させて嫌な思いが頭のなかをよぎるだろう。地震や大雨などの自然災害は人間の力ではどうにも

できない。受け止めるしかないが、なるべく起きないように、起きてても小さな被害で済むようにと昔から祈ってきた東北の歴史を考えてしまうこの頃である。



いい腰している



写真でお伝えする
東北の風景

「7 月初めの花」

写真撮影
尾崎匠

